



ゴットフリート・フォン・シュトラースブルクの『トリスタンとイゾルデ』における航海について

三木, 賀雄

(Citation)

神戸大学国際コミュニケーションセンター論集, 6:21-33

(Issue Date)

2009

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81002792>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81002792>



ゴットフリート・フォン・シュトラースブルクの 『トリスタンとイゾルデ』における航海について

三木 賀雄¹

『トリスタン物語』は 12 世紀にアングロ・ノルマン語で書かれたケルト伝説起源の文学作品であるが、現存する数種類の写本のうちで欠けることなく物語のすべてを伝えるものは残されていない。わずかに外国語による翻訳にはほぼ全容を伝える作品が見いだされるにすぎない。これら数編のトリスタン物語は、題材をとりあつかう手法の相違から、一般に流布本系と騎士道本系と呼ばれる二つの系譜に区分される。前者は語り手の主観をまじえず事実の叙述に徹する作品群で、ペルールの『トリスタン』、作者不詳の『トリスタン伴狂』ベルン写本、アイルハルト・フォン・オベルクによるドイツ語への翻訳『トリスタン』、そして『散文トリスタン』がこの系譜に属する。後者は、心理の描写や分析を重視する作品群で、トマの『トリスタン』、『トリスタン伴狂』オックスフォード写本、僧侶ロベールによるノルウェイ語への翻訳『トリスタンのサガ』、ゴットフリート・フォン・シュトラースブルクによるドイツ語への翻訳『トリスタンとイゾルデ』などがこれにあたる。

詩人たちはさまざまにこの伝説を語り継いできたが、死にいたる愛という主題を変えることも、彼らを悲劇的な運命にいざなう海と船の役割を描き忘れることもなかった。船上でのトリスタンの誕生。文武に秀でた美しい騎士に成長したトリスタンを伯父マルケの王国コーンウォールへ運ぶ海。海はまた、騎士モーロルトとの決闘で深手を負ったトリスタンを敵国アイルランドへ押し流す。トリスタンを救った王女イゾルデは、彼が倒したモーロルトの姪であった。首尾よくアイルランドを逃れて帰国したのち、トリスタンはふたたび船出する。マルケ王の妃となる女性を連れ帰るためである。竜退治の褒賞として与えられたイゾルデを、コーンウォールへ伴うトリスタンの航海。その船中で二人は誤って媚薬を飲む。それは彼らを宿命的な恋愛にかりたてる秘薬であった。イゾルデはマルケ王の妃となるが、トリスタンとの密会はずぶく。不義の発覚とモロアの森での逃避行、歳月がながれ、やがて恋人たちはマルケ王と和解する。イゾルデは王のもとへ帰り、トリスタンは海峡のかなたのブルターニュをさすらう。その地でトリスタンは王妃と同名の白い手のイゾルデを娶るが、王妃イゾルデへの想いはつのるばかり。ひそかに海をわたっては王妃のもとへ通いつづける。見知らぬ騎士から助勢を請われるトリスタン。戦いでの負傷。傷は致命的であった。彼を救える者は王妃をおいてほかにはない。知らせを聞いてブルターニュへ急行する王妃の船。その船を嵐がもてあそび、風が行く手をはばむ。ようやく白帆が風をはらみ、船が岸边に近づいたまさにそのとき、嫉妬に狂う白い手のイゾルデは、王妃の到着を知らせる合図であった白い帆を、偽って黒い帆とトリスタンに伝える。その虚言から王妃は来ないと信じた彼は、絶望のうちに命を落とす。そして上陸後に恋人の死を知った王妃も、深い悲しみから命を天に返す。以上の梗概からも明らかなように、トリスタン物語の作者たちは、トリスタンと王妃イゾルデを新たな運命に直面させる契機

¹ 神戸大学国際コミュニケーションセンター 教授 ymiki@kobe-u.ac.jp

として、海と船を用いてきたのである。

したがって、物語の語り手たちがどのように船をとらえ、海を見ていたかを知ることは、作品を理解する上で大きな手掛かりになるものと考えられる。この小論では、およそ 13 世紀のきわめて早い時期、おそらくは 1210 年頃に成立したとみられるゴットフリート・フォン・シュトラースブルクの『トリスタンとイゾルデ』を取り上げ、この作家の海事にかかわる考え方が作品にどのように反映し、影響を与えているかについて考察をおこないたい²。

作者ゴットフリートについて

最初にゴットフリートが生きた 12 世紀末から 13 世紀初頭の社会的な状況を簡単に整理しておきたい。ゴットフリートの生誕地とされるストラズブールは、775 年という比較的早い時期に商業特権を獲得したライン河畔の都市である。自然条件からライン河を遡上する交易船の南下限界点に位置するために、「ライン下流域から運ばれてきた商品のほとんどがこのまちでまずは荷を降ろした」といわれ³、「ライン通商圏での繁栄の原点」と称されている⁴。ストラズブールの商人たちはライン地方の主要都市で開かれる大市はもとより、「北はリュベック、東はニュルンベルク、南はジュネーヴやリヨンにまで足を伸ばし」、北欧やイギリスまで販路を広げて、「アルザス産の葡萄酒」、「穀物」、「地元産の並質で安価な毛織物」などを輸出し、帰航時には「塩漬け肉やイギリス産の羊毛」を帰荷として持ち帰ったという⁵。このようにストラズブールは内陸部にありながら水運によってイギリスと深く結ばれていた。イギリス通いの交易船によって海上を運ばれてきた商品は、河口域の街々で小型船に積み換えられてストラズブールまで遡上していた。このためストラズブールはライン河下流域の諸都市と商業的なかわりを維持していたとみられ、特にケルンとは流通経済を通して緊密な関係にあったのではないかと考えられる。ケルンが毛織物産業を中心としてストラズブール以上に深い関係をイギリスとのあいだで保っていたからである。

一般にドイツ人商人は「10 世紀末からイングランド人と平等に扱われ、他の外国人より有利な取り扱いを受けていたが、なかでもケルン商人は 978 年ごろテムズ河畔にギルド・ホールという商館を持っていた」という。リチャード 1 世はその敷地の「地代 2 シリングを免除するとともに、納税免除という特権を賦与」したほどであった⁶。もちろんイギリスにおける交易商品は、いうまでもなく羊毛が中心であったが、意外にもイギリス自身の海上交易能力は低く、「そのため、羊毛の輸出は外国人に依存して行なわれ」、「最初、大きな比重を占めていたのはフランドル人やイタリア人であったが、次第にハンザ商人にとって代わられる」という状態であったという⁷。このように初期ハンザの時代にはイギリスとライン河流域の都市を結ぶ交易ルートが確立され、ストラズブールやケルンの遍歴商人たちは自ら船を仕立て、あるいは便船を用いて、毛織物の原料と製品を媒介とした活発な交易活動を繰り広げていたのである。

ストラズブール、ケルン、イングランドを結ぶ商業上の関係は文化面にも影響を及ぼしていたとみられる。中世のヨーロッパで広くおこなわれていたように、聖職を志望する学生たちは各地の著名な学校を遍歴して

² テクストとして使用するの以下のプレイヤッド版“Tristan et Iseut”に収録されている Danielle Buchinger による, Gottfried de Strasbourg の“Tristan et Isolde”の現代フランス語訳である。引用の和文は拙いながらこの小論の筆者が翻訳を試みている。Marchello-Nizia, Christiane. (1995) Tristan et Iseut, Gallimard, Paris

³ 内田日出海, (2009) 『物語 ストラズブールの歴史』, 中央公論新社, p.75

⁴ 内田日出海, 前掲書, p.42

⁵ 内田日出海, 前掲書, p.80

⁶ 篠原陽一, (2008) 『海洋交通の世界史』, e-Book. <http://www31.ocn.ne.jp/~vsino/page003.html>, 2-4-1

⁷ 篠原陽一, 前掲書, 2-4-1

自らの学業修行の糧としていた。ストラスブールでは1262年頃にフランチェスコ会が「聖俗に開かれたハイ・レベルの学校を設立し、自由学芸七科、哲学、神学、教会法の授業をおこなった。司教もこれに支援を惜しまなかった。学生はパリをはじめ、オクスフォード、ケンブリッジ、ケルンなどに留学を義務づけられた」と伝えられている⁸。ゴットフリートの時代から時期こそ遅れるものの、中世の学術の拠点である修道会によって選ばれた遍歴修行の圏域が、商業上の交易圏との一致をみせることから、これらの地域には比較的早い時代から文化的な交流を実現できる環境が整えられていたものと推測される。またゴットフリートがラテン語やフランス語にも堪能であったことから、彼にパリ留学の経験があったのではないかとする意見も、このような事情から考えると首肯できるところであろう。

ゴットフリートの出自についてはほとんど何も知られていない。ただ『トリスタンとイゾルデ』の邦訳者である石川敏三氏は巻末の解説においてゴットフリートを「クレーリカーとみてもよいであろう」という見解を表明している⁹。石川氏によればクレーリカーとは「修道院付属のまたは司教座聖堂付属の神学校に行きながら、聖職者とはならず世俗的生活にかえった者」を意味する。たしかに10世紀から12世紀末にかけてのストラスブールはカトリックの司教が実質的な権限を担う司教都市であった。司教座聖堂付属の神学校が多くの在俗聖職者を育てていたとしても不思議ではない。この点についてはストラスブールの歴史に詳しい内田日出海氏がいま一步踏み込んだ意見を述べている。氏の指摘によるとゴットフリートは「ミニステリアーレ系と言われている」というのである。ミニステリアーレは司教の「世俗業務を司る家士(または家人)」であり、「忠誠心の強い行政的集団」を形成し、「基本的には司教の忠実な高級官僚として市民に直接に接触する立場にあった」存在であった。すでに彼らは「十一世紀にはあまねく誕生」し、「世俗の君侯や大小貴族に仕えた従僕の階級」に属し、「一般には聖職者叙任権闘争の過程で諸侯の側近として軍事的に糾合されたものの、やがて自由民となり、著しい社会的上昇を遂げた」というのである¹⁰。この意見にしたがうならば、ゴットフリートは文学的な才能に恵まれ、ラテン語やフランス語に堪能な在俗の聖職者で、ミニステリアーレとしての実務的業務にも精通した人物という印象が浮かび上がる。しかも生誕地とされるストラスブールがライン河交易によって繁栄していた都市であり、彼が識字階級として何らかの実務的な業務にたずさわっていた可能性が高いことからみて、その知識や経験が作品中の航海にかかわる記述に影響を与えているのではないかと考えられるのである。

ゴットフリートの航海理念

そこでまず、前述した梗概の中から航海に対するゴットフリートの意見が顕著にあらわれている部分を取り上げてみよう。ここで問題にするのは、騎士モーロルトとの決闘で負傷したトリスタンがアイルランドへ漂着するくだりである。モーロルトの刃の毒に侵されて死を覚悟したトリスタンは、運命に身をゆだねることを決意する。帆もなく櫂もない小舟にひとり身を横たえて海に漂う彼を、風と波が敵国アイルランドへ押し流す、というのが先行作品で語られる筋立てであった¹¹。ゴットフリートはこの部分を書き改めた。トリスタンはアイルランド王女のイゾルデだけが傷を癒せることを決闘のさなかにモーロルトから知らされていたという解釈を加えたのである。そしてそれゆえに、死に瀕したトリスタンは王に事情を打ち明け、王女による治療をもとめてアイルランド

⁸ 内田日出海。前掲書。p.91

⁹ ゴットフリート・フォン・シュトラースブルク著、石川敏三訳、『トリスタンとイゾルデ』。郁文堂。p.346

¹⁰ 以上ミニステリアーレにかかわる引用は内田日出海。前掲書。p. , 57-58

¹¹ たとえば、アイルハルト・フォン・オベルク作品 *Tristrant* (テキスト p.278)や作者不詳の *La folie de Tristan, version d'Oxford* (テキスト pp.225-226)にはこの筋立てが見られる。

への渡航を願い出たのだというのである¹²。王はこれに同意し、トリスタンをイゾルデのもとに送るための航海が周到に計画され、準備され、実行に移される。

夜になると、彼らは旅のために1隻の船とそれに載せる小舟を準備した。彼らは船内に、食糧やその他の必要な品々をどっさり積み込んだのである。最後に運命を嘆き悲しみながら、人々はあわれなトリスタンを船に移したのであった。船への乗り込みはひそやかに行われたので、乗組員はもちろん別として、誰一人として何も気づくことはなかった。トリスタンは王に彼の家来と財産を託し、彼がどのようになったかを確かな筋から知らされるまでは、何ひとつとして人に譲ることがないように頼んだ。彼はまた彼の竖琴を探しに行かせた。それは彼が身近に携えていく唯一の財産であった。それから彼らは海に出たのである。トリスタンとクルヴェナルに付き従ったのは8人の男たちだけであった。彼らは皆、この二人のために命を捧げることに同意し、ただひたすら彼らに服従することをキリストの名にかけて誓っていたのだ。…… いまやトリスタンは昼も夜も体力の限りを尽くしながら、船頭の老練な手腕に導かれ、まっすぐにアイランドをめざしていた¹³。

上記の引用からも明らかなように、ここでトリスタンをアイランドへ運ぶ船は、もはやここでは他のトリスタン物語に登場するような危うげな小舟ではない。「食糧やその他の必要な品々をどっさり積み込んだ」大船が用意され、「船頭の老練な手腕に導かれて」着実に運行される。トリスタンはあとに残す家来と財産の措置を王に託し、彼に随行する者たちには絶対的な忠誠を求める。アイランドに近づくと、船中で最もみすばらしい衣服に着替えたトリスタンは積載してきた小舟に乗り移り、あたかもその身一つで漂着したかのような演出がなされるのである。このようなゴットフリートのあからさまな書きかえから見えてくるものは何であろうか。トリスタンの治療のためにアイランドをめざすという明確な航海目的、十分に艤装を施した船で安全に彼をアイランド沖まで運び、土地の人々の不信を招かないように小舟に移して海岸に漂着させるという周到な航海計画、職業的な乗組員による確実な船舶の運航、トリスタンが故地に残す財産の保全、不慮の事態にそなえた船内秩序維持の徹底など、ここからは何よりも確実に手堅い航海を優先させるゴットフリートの姿勢が見えてこないだろうか。行く先も定めず、ただ宿命に身を任せ、小舟で荒海に乗り出す航海など、ゴットフリートには到底理解することも、許容することもできなかったのであろう。彼は従来のトリスタン物語にみられた航海の記述から不合理性や曖昧性を極力排除して、かわりに明確な目的性と具体的な計画性をそこに与えようと試みているのである。

航海目的や計画の明確化と同様に、ゴットフリートの関心は航海に必要な装備と積載品にも向けられている。たとえば、トリスタンの父リヴァーリンは、「多くの費用をかけて」装備を整え、「1年分の食料、高価な品々、日常の必需品」を船に積み込んでマルケ王の国へ出発する¹⁴。そのリヴァーリンが故国の危機の知らせに急遽の帰国を決意したとき、「1艘の船がすぐに用意され、彼の財産が積み込まれた。糧食に馬、それらすべてのものが航海のためにととのえられた」¹⁵。トリスタン自身の航海を記述するときも、ゴットフリートの姿勢は変わ

¹² テキスト. p.479

¹³ テキスト. pp.482-483

¹⁴ テキスト. p.395

¹⁵ テキスト. p.407

らない。マルケ王の甥と認められ、騎士に叙任されたのち、父の仇敵モルガーンへの復讐を決意するトリスタンのために、彼の忠実な養育係のルーアルは「すぐさま素晴らしい船を用意して、これ以上は望めないほどの品々をどっさり積み込んで」帰国のための航海を準備する¹⁶。あたかも積載品の豊富さが航海の安全を保障するかのように、ゴットフリートの語る船には食料や衣類、その他のありとあらゆる必需品が潤沢に積み込まれるのである。

たしかにゴットフリートが万全の装備にこだわる背景には、中世の海の厳しい現実があった。積載品についての記述からは、ありとあらゆる必需品を有り余るほどに積載しなければ安心できない中世の航海の危険な実態が想像される。事実、風、それも好都合な風向きの穏やかな風以外に頼るものがなかった中世の船舶にとって、嵐は言うまでもなく、風でさえも危険であった。作品中でリヴァリーンやトリスタンが行き来するケルト海や英仏海峡も、おそらくゴットフリートにとってはなじみの深い北海も、ともに高い波浪と激しい潮流がもみあう海の難所である。岸边近くであれば暗礁や砂州への座礁の怖れが、沖合であれば果てしない漂流への懸念が、常に船乗りたちを悩ましていたことであろう。実際、羅針盤を持たないこの時代の船舶にとって、あらゆる航海は難破や漂流と踵を接する危険な行為であったのだ。風向きや風力、潮流や波浪にたえず影響され、悪天候に見舞われれば為すすべもなく破局へ追い込まれる未発達な航海技術。運命に翻弄された当時の船乗りたちにとって唯一頼れるものは、荒波を耐え凌ぐ頑丈な船体と、あらゆる不測の事態にそなえた豊富な糧食や装備の準備ではなかっただろうか。

危険は何も自然の猛威ばかりではなかった。ヴァイキングの脅威は薄れたとはいえ、なお海上では海賊行為が横行していたのである。アイルランドの沖合で小舟に移され、土地の人々に発見されたトリスタンが彼らに語る偽りの身の上話に注目したい。人々の目を欺くためにトリスタンは自らを楽人であると詐称し、芸によって得た金を資金に商売に手を出した顛末を次のように話すのである。

「私は大きな富を得ました。そのために私は贅沢を好むようになり、身のほど知らずにもより多くの財を稼ぎたいと望んだのです。それで私は商売を始めることにしたのですが、このことが私を破滅に追い込んだのでした。私はある裕福な商人を仲間にして、二人して故郷のスペインで気に入った商品すべてを1艘の船に積み込んで、ブルターニュに行くことにしました。しかし大海原で海賊船が私たちを襲い、すべてのものを私たちから奪い取ったのです。悪党たちは私の仲間と乗り組む者たちを皆殺しにしまいました。私が傷を負わされただけで逃れることができたのも、私が本職の楽人であることを示してくれたこの豎琴のおかげなのです¹⁷。」

トリスタンは、自分はスペイン人で、仲間となった金持ちの商人とともに1艘の船を仕立て、「気に入った商品すべて」を積んで交易航海に出かけたのだという。語られている内容は、地中海経由でスペインに運ばれてきた奢侈品を北ヨーロッパで売り捌いて大きな富を得る、いわゆる投機性の高い交易活動の典型であろう。しかし船団を組まない単独航は外敵に襲われる危険を免れることができない。ゴットフリートは安易で無防備な航海計画の悲惨な結末を、トリスタンが扮する商人の口を借りて語ることによって、この種の交易活動の危険で不確実な側面を指摘し、戒めとしているのではないだろうか。12世紀末から13世紀初頭にかけて、すなわちゴットフリートの生きた時代に、海事社会はひとつの変革期を迎えていた。遠距離交易活動の隆盛にとも

¹⁶ テキスト, p.456

¹⁷ テキスト, p.487

ない、何にもまして多量の貨物を安全確実に運ぶための航海手法が重要視されはじめていたのである。そしてこのような海事社会の変化がゴットフリートの創作姿勢に大きな影響を与えているのではないだろうか。

広く知られるように12世紀の北ヨーロッパは商人ハンザ時代の胎動期であった。それは14世紀中葉以降の都市ハンザに先駆けて、商人たちが「都市連合の後援もないままに自らの団結力を通じて商圏を開拓した時代」だといわれている¹⁸。彼らはみずから商品を携えて海を渡り、遙かな異国で行商を行い、販路を広げて次第に財をなし、組織的な交易のための商圏を拡大していった。少量の奢侈品を主として扱う南方の地中海交易とは異なり、毛織物、葡萄酒、小麦など嵩の高い生活必需品が交易の中心であったため、より大きな利潤を得るためには商品輸送に用いる船腹の拡大が不可欠の要件となっていた。また扱う商品の多くが生活必需品であったため、ますます安定した商品供給が求められたが、それはとりもなおさず堅実な商取引方法と確実な航海技術なくしては実現できない要求であった。投機的あるいは冒険的な交易の排除、信用取引を極力避けた現金での決済、堅牢で積載能力に優れた船舶の建造、武装船団方式による航海の励行、冬季航海の禁止、万一の遭難にそなえた法律整備と損害を分散させる船舶持合制度の確立など、交易と航海の危険を回避するためのさまざまな手立てが講じられたが、それらはすべてハンザ的な堅実性追求の精神から生み出されたものといえる。このような新興商人たちによる先駆的ハンザの精神は、北フランス、ドイツ西部、イギリス南部の諸都市に新たな商活動醸成の気運をもたらし、種々の特許状と都市制度が彼らの活動を支えていたのである。

ゴットフリートが想定した船

ゴットフリートが主張する堅実な航海とそれを支える十全の艦装はそのような先駆的ハンザ精神の反映ではないだろうか。このような仮定を検証するために今ひとつ別なトリスタンの航海を例に引きたい。それはマールケ王の妃とするためにイゾルデを求めてアイルランドに向かうトリスタン一行の航海である。

トリスタンに王位を譲りたいと望む王に対して、王の顧問団は王の妻帯を強く要請する。妬ましく思うトリスタンよりも、王の嫡子に王位を継がせる方が好ましいと判断したからだ。幼い王子ならば容易に操ることもできようというのが顧問団の思惑であった。決断を迫られた王は顧問団の目論見を阻もうとして、実現することが困難な結婚の条件を持ち出して彼らに抵抗する。王はツバメが王宮へ偶然に運んできたひとすじの金髪を持主を花嫁として迎えたいと宣言するのである。困惑する顧問団を前に、トリスタンは金髪を持ち主を探し出し、王妃として連れ帰るための航海を王に願い出て、出発する。風と波がトリスタン一行を運んで行ったのはまたしても敵国アイルランドであった、というのが従来の物語の流れである。ゴットフリートが強硬に異議をさしはさむのは、まさにこの髪を運ぶツバメの逸話についてである。「コーンウォールのツバメがわざわざアイルランドにまで巣の材料の髪を毛を探しに行く」ことは不自然であるし、またトリスタンは「目的地も、航海期間も、探そうとする相手が誰かさえもわからぬままに、あてもなく大海に乗り出す」ことなどあり得ないというのが彼の主張である¹⁹。ここでもまた航海に対するゴットフリートの堅実で現実的な姿勢が明確に表明されているのだが、それは措くとして、彼はツバメの逸話のかわりに別な筋立てを語っている。すなわち王はイゾルデを深く愛している所以她以外の女性を妻にしたくないという偽りの決意を顧問団に告げ、敵対するアイルランドとの婚礼は事実上不可能であることを盾に結婚を回避しようとする。これに対して顧問団はトリスタンの聡明で慎重な性格や運の強さ、すぐれた語学の才能を理由に彼をアイルランドへの使者に立て、婚儀の成立

¹⁸ 高橋 理 (1980) 『ハンザ同盟』、教育社、p.54

¹⁹ テキスト、p.500

をはかるように王に強くはたらきかける。結局トリスタン自身が使者の役目を引き受け、王も不本意ながら航海の許可を与えることになった。

この航海のためにトリスタンが供に選んだのは、「王の側近で戦いに強く信頼もできる騎士 20 人」と「トリスタン自身コーンウォールや外国から金銭で雇った 60 人の騎士」、さらに「王の顧問官から無給で 20 人の貴族」であった。また「船には日々の必需品や食料やその他の商品を、どのような船もこの程度の人数の航海のために用意したことがないほど潤沢に積み込まれた」という。さらに船には当然のことながら騎士たちの馬も積載されていたと思われる²⁰。

数字に関する中世人の誇張癖を割り引くとしても、乗り組む人々の数から考えて、相当に大きな船であることがわかる。前述したように、彼らがアイルランド沖へ到着したとき、トリスタンは随伴の騎士たちに船内に隠れているようにと指示を与えるのだが、それはとりもなおさず、この船が被覆甲板を備えていること、また甲板下に多量の積載品とともに多くの人員を収容できる広い空間を持つことを意味するものである。もちろん身を隠す場所といえど甲板後部の船尾楼も考えられなくはないが、多数の人員を収容するにはあまりにも狭い。やはり船腹内とみる方が自然であろう。要するに、船体内の積載能力に優れたかなり大型の船が想定されているものと判断される。しかもこの船はきわめて頑丈な構造であったにちがいない。ゴットフリートの物語では馬の輸送が常態化して語られるが、それは必ずしも容易な作業ではなかった。なぜなら馬を船内に収容するためには相応の船体強度が求められたからである。一般的に北方の船にくらべて船体構造が脆弱な同じ時代の地中海船では、興奮した馬に船腹を蹴破られて沈没した事例さえ伝えられている。彼らはやむを得ず馬を宙づりにして輸送したのだという。

このように考えていくと、ゴットフリートが想定していた船は、トリスタン伝説の舞台となる英仏海峡やケルト海をその時代に往来していたネフ型船ではないことがわかってくる。ネフ型船はヴァイキング船の末裔で、その構造上の特徴を受け継いで一様に喫水が浅く、乾舷も低い。たとえば彼らのうちの貨物の積載を目的に建造されたクノール型の船でさえ、もっとも普及したタイプで全長 16.5 メートル、全幅 4.5 メートル、喫水はわずか 1 メートルであった。クノールには船首、船尾に部分的な甲板を持つものもあったが、それらは船倉と呼べるほどの構造体を構成するものではない。また戦闘用のラングスキップ型の比較的大きな船についてみても、たとえばデンマークのロスキルドで発見された残骸船は全長 29.40 メートル、全幅 3.80 メートルで、やはり喫水は 1 メートルに満たない。70 名程度の乗員は積載できるが、船底にバラストとして多量の石を積み込むため、荷物を積載する空間に余裕がなく、乗員の持ち込む生活必需品の置き場にも事欠くほどであった。その上、船底部に甲板を張ってはいしたが、被覆甲板を持たないことから馬の輸送に適しているとはいえない。

これに対してバルト海及び北海沿岸諸国での交易航海を生業とする商人たちは、深い喫水と高い乾舷に頑丈な構造を兼ねそなえた、重い積荷の輸送に適した船を利用しはじめていた。のちにハンザ同盟の花形商船として名を馳せるコグゲと呼ばれる船である²¹。エルビングヤストラルサントなどハンザ同盟加盟都市のシールの中ではしばしば姿を見せるコグゲ船だが、明確にそれと判断される残骸がブレーメン近郊のヴェーゼル川で初めて発見されたのは 1962 年のことであった。この残骸船は 38 年をかけて修復と保存のための処

²⁰ 以上トリスタンの随伴者についての引用はテキスト p.499、また馬の搭載についてはここでは明記されていないが、騎士が馬とともに航海することをゴットフリートは当然視していたらしく、たとえばモーロルトとの決闘場面やトリスタンの父リヴァーラの航海には馬の船への積載についての記述がみられる(注釈 14 の引用文参照)。

²¹ 日本におけるコグゲ船についての研究論文としては以下のものがあげられる。景山久人。(1997)『盛時ドイツ・ハンザの船舶について』研究論叢, 49 号, 京都外国語大学, pp., 474-482. 柏倉知秀。(2000).『コグゲ・ホルク・クラヴエール — 中世ハンザの船舶と海運 —』立正西洋史, 第 16 号, 立正大学西洋史研究会, pp., 21-24.

理が施されたのちに、ようやく2000年に一般に公開されている。使用されていた木材の年輪学的な分析から、建造はおおよそ1380年頃とみられ、その要目は「全長23.27メートル、全幅7.62メートル、型深さ—船尾楼と巻揚げ機(キャブスタン)を含めて7.02メートル」であった²²。水密性は不完全ながら全体的に甲板が張られていて、船尾には船体と一体化した楼閣をそなえ持つ。深く幅広い船倉は平底に近い船底形状と相まって高い積載能力を確保している。しかしながらこの船はゴットフリートの生きた時代のものではない。

その後もコグゲ船の残骸の発見は続き、現在までに発見された19隻のうち、もっとも古いものは1150年のコレルuppの船とされている。この船の要目は「全長と全幅がそれぞれ18.60メートルと4.90メートル」とプレーメンのコグゲ船にくらべて「長く、狭く、そして水線上が低い」²³。しかしすでにコグゲ船に固有の特徴はそなえていた。コグゲ型の船はこのコレルuppの船の時代か、あるいはその以前から進化の過程にあったのであろう。積載能力の向上をめざして船腹を広げ、喫水を深くとり乾舷を高くする努力がはらわれていたのだ。

しかもこれらのコグゲ船はゴットフリートの身近にあった。やがて「バルト海沿いのリューベックと西のライン河畔のケルン」は同盟諸都市の中でも最も強い勢力を誇る都市に成長する。コグゲ船は「英国やノルウェーに向けて穀物を、フランドルとフランスの趣味のよい顧客たちのために造船用の用材と毛皮を運んでいた。バルト海の新しい街々にはフランドルの織物や武器や、とりわけ肉や魚の保存のためのブルターニュ湾の塩をとどけていたのである。リューベックはノルウェーのスコーネンやストックフィッチのニシンの輸入で、またケルンはライン地方のぶどう酒と砂岩製陶器の酒壺の輸出で、それぞれに財をなす」途上にあったからである²⁴。ゴットフリートの時代のコグゲ船がどのような発達段階にあったかは不明だが、少なくとも積載能力という点で比較すれば、ネフ型商船とは格段の差が生じていたことは間違いない。それはネフをはじめ従来の船とは根本的に異なる設計思想に基づいて建造された船舶であった。速力よりも積載能力を優先させた丸く、深く、頑丈で重い船体、自衛のための船首と船尾の戦闘用楼閣、もともと風上への帆走には不利な一枚横帆の帆装に加えて、平底に近い船底形状が横流れを起こし、風上への切り上がり性能はますます低くなる。いわば速力や風上への切り上がり能力を犠牲にして、積載能力と安全性を優先する思想に徹した設計であるといっても過言ではない。ここから見えてくるものは、たとえ多くの航海日数を要するとしても、大量の貨物を安全に確実に輸送しようとするハンザ商人の強い意向である。ゴットフリートは作品中の船としてそのようなコグゲ船を想定していたに違いない。

ゴットフリートのトリスタン像

以上のように作品にあらわされている航海理念や船舶形状などを検討すると、そこには先駆的ハンザの時代精神が投影されていることが理解される。そしてそのような時代精神がトリスタンの人物像にも影響を与えているように思われてならない。

ゴットフリートによるトリスタン物語の特徴はきわめて濃厚な教養主義に彩られている点にある。とりわけ外国の文化や習慣に対する興味や、外国語への関心の高さは作品中の随所に見ることができる。たとえば、トリスタンの父リヴァリーンは「騎士道的美徳を学び、礼儀作法を磨く」ために、海を渡ってマルケ王の宮廷を訪ね、そこで1年の歳月を過ごす。「異郷の風習を学べば、自らのそれも向上するし、そのことで自分の名前も

²² 以上プレーメンのコグゲ船についての引用は Hoffmann, Gabriele. Schnall, Uwe. (2004) *La cogue de Brême. Chasse-Marée*, 171. p. 43

²³ 以上コレルuppのコグゲ船についての引用は Hoffmann, Gabriele. Schnall, Uwe. 前掲書. p. 47

²⁴ 以上コグゲ船の輸送貨物については Hoffmann, Gabriele. Schnall, Uwe. 前掲書. p. 40

世間に広く知れわたることになるだろう」というのが訪問の動機であった²⁵。たしかにリヴァリーンの行動には騎士としての熟達をめざして諸国をめぐる遍歴騎士のそれを思わせるものがある。しかしリヴァリーンの求めたものが武術の向上よりも徳操を深め礼儀を磨くことにあること、そして何よりも異文化との接触によってもたらされる自己啓発と名声の獲得にあることは興味深い。また幼い頃にノルウェイの商人に誘拐されて異国に置きざりにされたトリスタンは、偶然に出会った獵人の一行を警戒して偽りの身の上話を彼らに聞かせる。その中でトリスタンは、自分は他国の裕福な商人の息子で、幼い頃から外国の商人たちと多く交わり、異国への興味が高じたあげく、父のもとを出奔して他の商人とともにこの国に来たのだと説明する。すると獵人たちは「異国で暮らすことは多くの人の心に善をなし、あらゆる美德を教えてくれるものだ」といって彼を歓迎する²⁶。このようにゴットフリートは外国文化との交わりが生み出す効果をつねに肯定的に表明するのだが、それが騎士階級を対象とした場合でも、商人層を対象としている場合でも等しく変わることはない点に、まず注目しておきたい。そしてそれ以上にゴットフリートがみせる外国語習得への強いこだわりが興味をそそる。

多くのトリスタン物語にみられるように、トリスタンは文武両道に秀で、特に音楽の能力に恵まれた騎士として特徴づけられている。ゴットフリートはこれに加えてトリスタンの外国語の才能を再三にわたって強調する。ゴットフリートによれば、トリスタンは幼い頃から外国語の習得のために異国へ送られ、書物による知識の涵養を義務づけられながら育てられたというのである。トリスタンを誘拐しようとするノルウェイの商人たちは「子供がこれほど多くの外国語を知っている」ことに驚きをかきさない。「彼らが旅の途中で何処の土地を訪れようとも、これほどの外国語の達人をみたことがなかった」というのである²⁷。またゴットフリートはトリスタンの知る外国語を具体的に羅列までしてみせる。トリスタンはラテン語、フランス語、ブルターニュ語、ウェールズ語を話し、ノルウェイ人、アイルランド人、ドイツ人、スコットランド人、デンマーク人などを相手に会話ができるのである²⁸。しかしこれらはまさに初期ハンザの交易圏の言語ではないか。しかも、ひるがえって考えてみれば、そもそも騎士にこれほど多くの外国語の素養が要求されていたのであろうか。たとえ遍歴騎士に国際性が求められていたとしても、元来が「戦う人」である彼らにとってそれほど多様な言語能力が必要であったのだろうか。次の引用がこの疑問に答えを与えてくれるかもしれない。

前述したように、マルク王の顧問団は現地の言葉がよくできることを理由の一つにしてトリスタンをアイルランドへ向かわせた。ウェックスフォードの沖合いに到着したトリスタン一行は用心深く港の外に錨をおろす。モーロルトを決闘で喪ったアイルランド王はマルク王を激しく憎悪し、コーンウォールの住民が彼の国に近づくことがあれば即刻成敗するように命じていたからである。そこでトリスタンは船内の貴族と騎士たちの正体を知られることを恐れ、彼らに次のような命令を与えたのである。

「あなたたちはもう何もしてはいけません。船の中に隠れて、陸上から見られないように用心をなさい。水夫と乗組員だけは船の入口の前の甲板にとどまって、陸の方をよく見張っているのです。でもあなたたちは誰一人姿を見せてはいけません。静かにして、船の中にいるのです！ 私は外に出ています。この国の言葉を知っていますからね。すぐに町の住民たちが私たちのところにやって来るでしょうが、私たちが歓迎しないことでしょう。だから私は彼らを欺くつもりです。で

²⁵ テキスト, p.395

²⁶ テキスト, p.430

²⁷ テキスト, p.419

²⁸ テキスト, pp.,437-438

もあなたたちはかならず中に隠れておいてくださいね。あなたたちが見られることでもあれば、すぐに戦を背負込むことになるでしょうからね。アイルランドのすべての戦士が私たちを攻撃するでしょう。結果が私にとってどのようになるとしても、私は明日の朝に上陸して冒険を試みるつもりです。私が留守にする間は、クルヴェナルとこの国の言葉がわかる者だけが船上に姿を見せておくのですよ。」²⁹

トリスタンは随行者たちが船上に姿を見せることを厳しく禁じる。その一方で「クルヴェナルとこの国の言葉がわかる者だけが船上にいるように」と指示し、「水夫と乗組員」だけが船上で見張りをするように命じている。つまりトリスタンの師であるクルヴェナルと異国を巡る船乗りだけが言葉を理解し、彼らだけが計画の遂行に必要なとする見方が示されているのである。やがて港の防備を任されているアイルランド主の主馬頭とその配下の者たちが武装して駆けつけてくる。トリスタンは彼らに対して、自分はノルマンディの商人で、交易航海の途上で嵐に遭遇し、仲間の一艘の船ともはぐれて、ようやくこの港に避難場所を求めてやって来たのだと偽りを述べる。さらにトリスタンは主馬頭と彼の配下の者や土地の人々を高価な贈り物で懐柔し、主に対しては金品の献上を気前よく申し出て、船の安全保証と滞在許可を獲得するのである。

この場面はきわめて象徴的であるといわねばならない。異国との接触が求められる局面では、土地の言葉を話すことのできない貴族や、戦以外に能のない騎士たちは交渉の表舞台から退けられ、船内にとどめ置かれる。彼らが再び姿を見せるのはトリスタンの計画がすべて実行され、イゾルデとマルク王の婚礼が合意された後のことである。それも、きわめて儀礼的な存在として登場するにすぎない。封建的階級制度の上層部を占めながら、制度そのものに縛られ硬直化する貴族と騎士たちとはうらはらに、ゴットフリートはきわめて柔軟で変化自在な騎士トリスタンを描き上げる。商人を詐称することもいとわず、土地の言葉を自在にあやつり、敵意をむき出しに押し寄せる群衆には愛想をふりまき、戦も辞さぬと意気込む主馬頭を贈り物でなだめ、土への高価な献上品を条件に彼の乗組員と船に対する平穏と保護の保証を取り付ける。これはまさしく、新天地での商圏拡張に向かう遠距離交易航海の船主船長のような役回りではないだろうか。略奪や戦争を目的とする遠征航海とは異なり、交易航海では海のかなたの異なる文化とたえず接触し、相互に信頼を築きながら商業活動を展開する。そのためには武具や武器に代わって、相互理解のための言語能力が必要不可欠であることはいうまでもない。さまざまなトリスタン物語に共通する主人公トリスタンの魅力が、優秀な騎士でありながら、同時にそれを超える何者かであることにあるとするならば、ゴットフリートのトリスタンには、どのような状況にも対応できる海洋的な性格、それも交易航海者としての魅力がそなわっているといえるのではないか。

そして、それもまたゴットフリートの生きた時代と地域の精神風土の反映であり、ゴットフリートその人の理想とする人間像が投影されているのだと考えられないであろうか。ゴットフリートがこの物語を執筆したとされる13世紀初頭という時代にふたたび注目したい。たとえば中世商業史の碩学アンリ・ピレンヌが伝える有名なフイクルの聖ゴドリックの立身出世譚がその典型を示すように、遠隔地交易が拡大し、恒常的な交易システムが確立され、取引先各地に支店が置かれるようになると、ハンザ商人は次第に遍歴的な交易活動から身を引き、一定の都市への定住をはじめた。彼らにとって商業活動はもはや「都市にいながらにして通信により支店と連絡すれば」事足りるようになったのである。ところが通信を交わすためには文字を読み書きできる人材が

²⁹ テキスト、p.501

必要になる。この一点において聖職者をはじめとする識字階層は交易活動と密接にかかわりを持つ。中世社会において彼らは文字を理解する数少ない存在であったからである。「聖職者は各方面で重宝がられた。君主・諸侯は公式文書作成を彼らに委ねたが、十二世紀中頃までは商人の間でも聖職者が文書業務を独占していたのである。商人が航海に乗り出し外地に赴く時にも聖職者が随伴し、相手方との交渉に協力したり、文書を作成したり、通訳を勤めたりした。商人の宗教生活を司ったことはいうまでもない³⁰。聖職者は交易活動とも密接なかかわりを持ち得る立場にあったのだ。ましてや「司教の忠実な高級官僚として市民に直接に接触する立場」のミニステリアーレという職責にあったとするならば、ゴットフリートが交易活動の内情を知悉していたとしても不思議ではないし、たとえ彼自身が直接その業務にたずさわっていなかったとしても、彼の周辺にはそのような同僚や知人が数多く存在していたと想像することにそれほど無理はないであろう³¹。彼らは商人に随伴して異国の人々と接触し、交渉し、通訳をし、計算をし、記録を取り、取引をまとめ上げる、いわば交易事務のかなめとして活躍していたのだ。自明ながら遠距離交易活動は異文化との接触を前提としておこなわれ、そこでの商業行為が言語の理解なくしては進展を見ないことはいうまでもない。とするならば、優秀な騎士でありながら、アイルランドの沖まで「船長」として航海し³²、到着すると貴族や騎士たちを船倉に押し込み、たくみに現地の言葉をあやつって交渉をまとめるトリスタンの姿に、騎士を超える新しい人間像として、ゴットフリートは自らが属する職業階層の理想化された姿を重ね合わせてみせたのだ、とはいえないであろうか。

結語

以上述べてきたように、この小論では、ゴットフリートが作品中で表明する航海理念と船舶の特徴について検討を加えてきた。航海理念については堅実で現実的な航海目的と万全の艦装から、また船舶については被覆甲板を持つ堅牢な構造と積載能力の大きさから、なによりも堅実な航海手法と船舶建造方針を求めたハンザ的精神が強く反映されていることが理解できた。また主人公のトリスタンには、疑いなくゴットフリートの教養主義的傾向が反映されているとみるべきであろう。特に異文化との接触を善とし外国語の習得を奨励する姿勢には、たえず交易圏の拡大をめざした時代精神の影響ばかりにとどまらず、その実務的な交渉を担ったとされる識字階層、すなわち聖職者、あるいはミニストリアーレとしての自負が感じられてならない。しかしながら彼らの立場は微妙であった。たとえばドイツの騎士制度のフランスへの影響を研究するドミニック・バルテルミはその著書において、ブリュージュの聖職者ベルチュルフを取り上げて紹介している。1127年のシャルル善良王の殺害に関わったこの人物は大ミニストリアーレであった。たしかに身分こそ「やむなく伯の農奴であると認めざるを得なかった」が、「差配人としての職務は金持ちになること、権力を握ることには役立っていた。しかし軍事的な職務から得られるほどの名誉は望むべくもない。その上しばしば、伯や司教のミニストリアーレは、都市では貴族たちよりもむしろ裕福な都市住民と親しくなることに努めていた」という。ブリュージュの住民たちの中でベルチュルフの一族の者は「細心の注意を払いながら住民たちの友となり、顧客となり、そして騎士たちを毛嫌いしたのであった。しかしながら彼らの財力や影響力からみて、彼らは騎士のように見られたい — つまり騎士になりたいと努めていた」のである³³。

³⁰ 高橋 理. 前掲書. p.92

³¹ 内田日出海. 前掲書. p.58

³² トリスタンは le maître du navire「船長」としてこの航海を取り仕切る。テキスト. p.501

³³ 以上ベルチュルフにかかわる引用はすべて Barthélemy, Dominique. (2009) La chevalerie de la Germanie antique à la France du XII^e siècle. p. 298

都市では商人をはじめとする新興市民層が徐々に勢力を拡大し、次第に騎士階級とのあいだに軋轢を生みだす中で、後者に仕えながらも財力と影響力を強めるミニステリアーレは、たえず微妙な立場に立たされていたのであろう。実際、領主や司教の差配という役割を与えられ、荘園経営や商業交易の実務的権限を握っていたミニステリアーレたちは、次第に実力を養い、従来の階級制度の中で不遇をかこつ自らを新しい騎士階級像に昇華させたいと望んでいたのかもしれない。

ゴットフリートがそのようなミニステリアーレの一人であったか否かの確証はない。しかし少なくとも彼は自らのトリスタン物語に航海に関する合理的な判断を導入することによって、作品の本質をまた別な方向へ導いたといえる。結果として物語のケルト伝説に由来する偶発的、非合理的側面は姿をひそめ、かわって明確な航海目的をもち十全の艦装と計画に裏づけられたきわめて現実的な航海理念が物語を展開させていく。これは大きな変化だといわねばならない。なぜなら宿命の物語は人間の意志の物語に姿を変えたのだから。運命に翻弄されるトリスタンから、人智のかぎり尽くして運命に立ち向かうトリスタンへの変貌。そこには自らの才覚を信じて万里の波頭を超え、あらゆる困難を乗り越えて異郷の果てをめざした真の航海者の心意気が伝わってくる。ゴットフリートがトリスタンに仮託して描き上げたものは封建的諸制度の制約を越えて、より自由に自己の実現を果たそうとする、そのような新しい人間像ではなかったのだろうか。

On the voyage in “Tristan et Isolde” of Gottefied von Strasbourg

Yoshio Miki

“Tristan et Isolde” by Gottefied von Strasbourg is translation of the Tristan tale in the 12th century written in French. In this tale, the sea and the voyage are an important element which determines the fate of characters. Therefore, in order to understand a work, it is necessary to get to know the view about the author's sea and ship. The 13th century was the early Hanseatic merchant's time from the 12th century when Gottefied was useful.

The view over a voyage and the sea of the Hanseatic age is reflected in the work. It is an aim of this paper to get to know what kind of thing it was.